

2018年9月7日

日本ロレンス協会会長 浅井 雅志

日本ロレンス協会副会長 田部井 世志子

会員の皆さまにおかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、今年度の日本ロレンス協会第49回大会は、6月30日（土）、7月1日（日）に仙台の東北学院大学で開催され、成功裏に終了しました。今年もまた、力のこもった発表、それにシンポジウムやワークショップでの活発な議論が交わされました。

6月30日には、山田晶子氏が「ヘプバーン大尉の“passional changes”——「大尉の人形」に見られるロレンスの新しい男女関係の希求——」のタイトルで、ヘプバーン大尉が、自分を“nothing but a doll”と扱う妻エヴァンジェリンとの関係を超えて、“honour and obey”と「星の均衡」の思想を体現するような新たな男女関係を模索する様子を論じられました。

続くシンポジウム「ロレンスに触れる——象徴、劇場、写真」では、まず新井英永氏が、近年のロレンス協会での「情動論的転回」と「視・触覚論的転回」への継続的な注目を指摘され、その関心を引き継ぎ、展開する意図をもって、続く3人の講師の方々とともに、従来の精神／血、言葉／肉体等のロレンスの二項対立を再考されました。

まず井出達郎氏は「偶有性への触発——D. H. ロレンスとキメラの象徴」のタイトルで、ロレンスの晩年のエッセイや小説に見られる、「個体が個体としての輪郭を備えつつ、同時に他者にもなりうるという動的な感覚」に注目してこれを「偶有性」と呼び、ロレンスの個人主義を超脱する方途に新たな光を当てられました。

星久美子氏は『『ロスト・ガール』再読——ライブ・パフォーマンスと映画、そして人間の知覚』の中で、この小説に登場するさまざまな人物を「ライブ・パフォーマンス＝接触＝触覚」、および「視覚＝映画」を代表する存在と見て、この作品に対する斬新な視角を提示されました。

最後に高村峰生氏は「モダニズムにおける「快樂」と「本物性」——ロレンス、ブルースト、写真」というタイトルのもとに、ロレンスとブルーストという同時代の英仏を代表する作家が、この時代に台頭してきた写真という媒体に対する考えを対比させました。ロレンスがこれを「本物らしさ」の位相を意図的にずらすものと見るのに対し、ブルーストは「事物のうちに隠れた諸相を明るみに出すもの」と捉えたことを指摘し、それぞれの見方を時代に対する「超克」と「耽溺」と捉え、2人の代表的な近代知識人に見る「モダニズム的な快樂の方向性」を浮き彫りにされました。このように、3人の講師それぞれが、独自の観点から実に刺激的な話をされました。これに続く議論も大いに盛り上がりました。

7月1日には、大田信良氏の司会・構成で、ワークショップ「オクスフォード英文学と冷戦期の／ポスト帝国日本の「英文学」——F・R・リーヴィスの退場を規定した歴史的可能性の条件とは？」

が行われました。まず大田氏は、「オクスフォード英文学こそがF・R・リーヴィスの退場を規定した歴史的可能性の条件だったのか?——「グローバル冷戦」におけるポスト帝国日本の「英文学」とロレンス研究」と題して、「リーヴィスにとってなぜロレンスだったのか」という問いを、にもかかわらずなぜ「ポスト帝国日本」の「英文学」のメインストリームはロレンスではなかったのかという問いに接続します。この問題設定の背後には、従来の「アメリカの影」のみならず、むしろ「帝国イギリスの影」、さらにはそれをも含みこむ「グローバル冷戦」というより広い枠組みの中で、日本の「英文学」、「英学」、そしてさらに広く、モダニティという条件のもとにある日本の歴史を新たにグローバルな空間性に開いた上で捉え直したいという問題意識があったようです。

続く高田英和氏は、「偉大なる伝統の創出?——F・R・リーヴィスとスコットランド文学の分離」のタイトルのもと、Kailyard School と Scottish Renaissance という補助線を引いた上で、リーヴィスによる英文学の伝統の創造/捏造は、スコットランド文学とその伝統を排除・消去した上に成り立っているのではないかとの仮説の証明を試みられました。

最後に外部講師の川田潤氏は、「文学と科学の対立を歴史化する」のタイトルのお話を、この「対立」についてのC・P・スノウとリーヴィスの論争から説き起こし、そこにトリリングやマカリを絡ませ、さらにシラーの美学と道徳との再結合を評価するベルとそれに疑問を唱えるスピヴァクを対置した上で、リーヴィスのダブルバインド的側面を検討されました。これに続くフロアとの質疑応答も非常に活発なものになりました。

この2日間の大会のために、会場設営と大会運営にご尽力いただいた井出達郎先生ならびに東北学院大学のスタッフや補助の学生の皆さま、また協会の執行部の先生方をはじめとする方々に、心よりお礼申し上げます。

次に、総会での審議および承認事項をご報告申し上げます。

#### 1. 委員会等の構成メンバーについて

委員会等の構成メンバーを変更・整理しました。主な点は以下の通りです。

- ①評議員の地区割りを、会員減少に鑑み、北海道と東北地区を合併し、3名の評議員を出す。ただし1名は未定のまま。
- ②役員会に、編集委員長と事務局を入れる。
- ③執行部にも、同じく編集委員長と事務局を入れる。
- ④事務局から編集事務を外す。

#### 2. 会計担当者の交代について

3年間会計を担当していただいた福田圭三先生の任期満了に伴い、新たに鳥飼真人先生に引き受けていただくことになりました。福田先生、長いあいだ本当にありがとうございました。鳥飼先生、これからどうぞよろしく願いいたします。

### 3. 協会 50 周年記念大会

来年は協会創立 50 周年の記念すべき年となります。これを記念して例年とは一味違った新しい企画を考えています。現在までにはほぼ決まったのは、国際的にも活躍されているノッティンガム大学の Sean Matthews 氏を招いてお話をしてもらうこと、また、協会員ではありませんが、記念碑的な『評伝 D・H・ロレンス』を出版された井上義夫先生をお招きして講演をしていただく、等です。シンポジウム、ワークショップについては鋭意検討中です。研究発表はもちろん受け付けているので、積極的にご応募ください。

日程は、2019 年 6 月 8 日（土）、9 日（日）になります。例年より少し早いのですが、Sean Matthews 氏の来日時期に合わせる形になりました。そのため、大会案内から出欠締め切りまでの時間が例年より短くなりますが、ご協力をお願いします。

会場は慶應義塾大学日吉キャンパスでほぼ固まりました。武藤浩史、近藤康裕両先生には大変お世話になりますが、どうぞよろしく願いいたします。

### 4. プログラムにおける肩書の扱いについて

プログラム等における肩書の表記について、取り扱うか、あるいは所属名だけにするのかなどについて議論した結果、現状のままで行くことにしました。

### 5. 2016 年度会計決算報告と 2017 年度予算案

会計の福田圭三先生からそれぞれ報告と提案があり、承認されました。福田先生、ならびに会計監査の石原浩澄先生と星久美子先生、誠にありがとうございます。また、昨年度には倉持先生から 10 万円の寄付がありましたので、改めて付記します。本当にありがとうございます。

### その他

1. 吉村宏一先生が、平成 30 年春の叙勲において「瑞宝中綬章」を受賞されました。総会で皆さんに紹介するとともに、懇親会の席で杉山先生に受賞の経緯を紹介していただきました。
2. 過去の会誌の電子化が、高田先生、近藤先生のご尽力で完了しました。本当にありがとうございます。<http://dhlsj.jp/research.html> をご覧ください。なお、バックナンバー（1991～2007）は科学技術振興機構による Journal@rchive 事業によって電子化され、公開されています。
3. 今年 5 名の新入会員がありました。例年にないことで、とてもうれしく思います。
4. 執行部で議論した結果、会誌の配布を、論文執筆者 10 部、書評執筆者 3 部に変更しました。

それでは皆さま、来年 6 月に首都圏でお会いしましょう。